

# *Tattvasaṃgraha*, śabdārthaparikṣā における vidhi

藤 井 真 聖

## 1. 問題の所在

8世紀頃に活躍したとされる仏教の論師シャーントラクシタ (Śāntara-kṣita) の著作として、当時のインドにおける様々な思想を網羅的に取りあげ、批判して行くという哲学綱要書的な性質をもった書 *Tattvasaṃgraha* (TS<sup>1)</sup>) があり、さらにその TS には彼の弟子であるカマラシーラ (Kamalaśīla) が施した注釈 *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) がある。この TS および TSP の Śabdārthaparikṣā (16章) においては言葉が表示するものとはいったい何であるのかという問題をめぐり、様々な学派の見解が引用され、仏教徒の立場から批判が加えられる。しかしながら、この16章冒頭にはその実態があまり明確でない対論者の呼称が見られる。その対論者は vidhiśabdārthavādin と呼ばれている。彼らは直接的な肯定 (vidhi) と否定 (niṣedha) によって実在の本質が言い表されるために、肯定が語の意味であると主張するのである。

〈資料1〉 [TSP274 : 21-22]

vastu eva hi paramāthataḥ śabdapratyayagrāhyam ataḥ śabdaiḥ sāksāḍ  
vidhiniṣedhābhyāṃ vastusvabhāvavapratipādanād vidhir eva śabdārtha iti  
vidhiśabdārthavādināṃ darśanam/

勝義として実在そのものは語とそれによる知識として把握される。従って様々な語により、直接的な肯定と否定として、実在を本質とするものが言い表されるから、肯定が語の表示対象である。というのが、肯定が語の意味であるとする者 (vidhiśabdārthavādin) の見解である。

一方この見解に対してアポーハ論者 (apohavādin) は、語による知識が誤謬であることを本来異なっている対象に無区別なかたちを与えることによるとする。ここではいわゆる「知覚判断 (adhyavasāya<sup>2)</sup>)」が問題となっているわけである。ダルマキールティは感官知の直後に生じ、対象にそれとは異なる内容を与える誤謬知の一種<sup>3)</sup>としてその働きを考えていたとされる。そして勝義として言葉には表示対象となる事物の本質はないと反論するのである。

〈資料2〉 [TSP274 : 22-25]

apohavadinām tu na paramārthataḥ śabdānām kiṃcid vācyaṃ vastusvarūpām asti/ sarva eva hi śabdapratyayo bhrānto bhinneṣv artheṣv abhedākārādhyavasāyena pravṛttheḥ yatra tu pāraṃparyeṇa vastupratibandhaḥ tatrārthāvisaṃvādo bhrāntatve'piti darśanaṃ.

一方アポーハ論者にとっては、勝義としては語には表示対象としての事物の本質などというものは全く存在しない。全ての語による知識は誤謬である。それぞれ個別の対象に対して無区別な形象を判断することによって〔語による知識が〕起こるから、ただし、間接的に個々の事物との結びつきがある場合、対象と矛盾しない〔語による知識〕がある。〔実はその知識は〕迷乱であるのだけれども。という見解である。

この TS16章冒頭の対論者に関する言及はこれまでの先行研究においても幾度か行われている。Mookerjee は早くからこの問題について述べていた。彼の研究書の16章に関する著述の導入として述べられるのは Nyāya-Vaiśeṣika, Mimāṃsā といった実在論的な立場に立つ学派のことである。<sup>4)</sup> [伊原1951 : 19] においてはこの対論者は「肯定語義論者」と訳され、その背景となる具体的人物としてプラシャスタパーダ (Praśastapāda) の名があげられる。<sup>5)</sup>また [太田1973 : 274] では「冒頭に掲げられるのはヴァイシェーシカ説であり、その相手をカマラシーラが語義肯定論者と称する」との内容を述べている。<sup>6)</sup>しかし、この対論者が即ヴァイシェーシカであるのか、何を主張しているのか、この呼称 (vidhīśabdārthavādin) をどの様に理解すべきか、といった点に関

して検討すべき問題が多く残されていると考えられる。筆者にはこれらの多くの問題を直ちに明確にすることはできない。そこで本稿では先行研究に依拠しつつ、プラシャスタパーダなどに見られるヴァイシェーシカ的な要素について検討を続けると同時に、16章における vidh という語について同章の用例を参照することにより、この対論者の持つ様々な問題点について資するところがあるかどうかを検討したい。

## 2. ヴァイシェーシカの観点から

従来からこの部分の中心的な対論者として考察されてきたヴァイシェーシカの観点からも検討しなければならない。まず、問題の偈と注釈部分の試訳をおこなう。

〈資料3〉 [TS274 : 17-26]

yadi nopādhayaḥ kecid vidyante paramārthataḥ/  
daṇḍī śuklaś calaty asti gaur ihetyādīdhīdhvani //867//  
syātām kiṃ viṣayāv etau nānimittau ca tau matau/  
sarvasminn avibhāgena tayor vṛtter asambhavāt<sup>7)</sup> //868//

[試訳]

もし、勝義として様々な限定要因 (upādhi) が少しも存在しないならば、「棒を持つもの」「白い」「動く」「ある」「牛」「この〔糸に布がある〕」というような観念や言葉はどうして存在し得ようか、これら二つが根拠のないものとは考えられない、全てのものに差別がなくなるのでその二つが働くことがなくなるから。//867・868//

〈資料4〉 [TSP275 : 4-11]

---tathā hi daṇḍī viṣāṇīty ādīdhīdhvani loke dravyopādhikau prasiddhau  
śuklaḥ kṛṣṇa iti guṇopādhikau calati bhramtīti karmanimittau asti vidy-  
ate iti sattāpravṛttinimittakau, gaur aśvo hastīti sāmānyaviśeṣopādhi  
iha tantuṣu paṭa iti samavāyabalāt /

tatraiṣāṃ dravyādinām abhāve daṇḍity ādihidhvanī nirvṣayau syātām  
 iti / ādigrahaṇām pratyekam abhisam̐badhyate / tena pratyekaṃ chatrī  
 viṣāṇīty ādisamānajātiyadhidhvanīnām grahaṇam bhavati / viśeṣā  
 yoginām eva grāhyā iti na teṣām ādiśabdena praigrahaḥ /

[試訳]

----即ち「棒を持つ者」「角を持つ者 (viṣāṇin)」という観念や言葉は実体を限定要因とするものであると、世間一般に認められている。「白い (śukla)」「黒い (kṛṣṇā)」という (観念や言葉) は属性を限定要因とするものである。「動く (calati)」「さまよう (bhramti)」というのは運動を根拠とするものである。「有る」「存在する (asti vidyate<sup>8)</sup>)」というの是有性 (sattā) を適用根拠とするものである。「牛」「馬」「象」というのは普遍かつ特殊の限定要因である。「この糸に布がある」というのが内属による〔限定要因である〕。実体などが存在しないならば、「棒を持つ人」などの観念や言葉は対象を持たないということになるであろう。ād i によってとりこまれるのは個々の和合である。それによって個々の「傘を持つ者 (chatrin)」「角を持つ者」といった同種の観念や言葉の理解が生じる。ただし、究極の特殊は修行者達だけに認識されるものであるから、それら (究極の特殊) は ādi という語によっては含意されない。-----

プラシャスタパーダは PBh において上位 (para) と下位 (apara) 二種の普遍があることを主張する。彼によれば、そのうち上位のものは多数を対象とするものであり、随伴 (anuvṛtti) [知 (pratyaya)] のみの原因となるものであるために普遍だけであり、一方下位のものとは実在性などのように、少数を対象とするために、普遍であると同時に特殊でもあることになる。さらにこれに続いて究極の特殊の問題が説かれる。<sup>9)</sup> 究極の特殊という問題についてのプラシャスタパーダの解説によると、それは、消滅や発生を離れた恒常な実態、つまり原子・虚空・時間・方角・我・意に関してそれぞれに存在していて究極的な差異の知がおきる原因であるとされる。<sup>10)</sup> 上記の TSP においてはこれらの上位の普遍としての有性 (sattā) ・下位の普遍かつ特殊・究極の特殊といった

ものが語の根拠としてあげられている。そしてさらに我々（一般の人々）とは異なったヨーガ行者の認識についての言及が見られる。〈資料3〉参照。ヨーガ行者の認識や究極の特殊について PBh は次のようにも述べる。

〈資料5〉 [PBh : 321]

tathāsmadviśiṣṭānām yoginām nityeṣu tulyākṛtiguṇakriyeṣu paramāṇu  
ṣu muktāt mamanassu ca anyanimittāsambhavād vilakṣano'yaṃ iti  
pratyayavyāvṛttih deśakālaviprakarṣe ca paramāṇau sa evāyam iti pra-  
tiabhijñānaṃ ca bhavati te'ntyā viśeṣāḥ /

[試訳]

同様に、私達より優れたヨーガ行者の恒常で形相・属性・運動が等しい原子と解脱した我と意に関して、他の根拠に基づくことは不可能であり、それ自身の根拠により、それぞれの基体ごとに「これは〔他と〕異なる」「これは〔他と〕異なる」と観念の排除がなされる。そして空間と時間の距離が離れていても、原子に関して「これがそれである」という再認識を生じさせる。それらが究極の特殊である。

また、TS 〈資料3〉における iha は TSP 〈資料4〉を参照することにより、VS にも見られ<sup>11)</sup>、「この糸に布がある (iha tantuṣu paṭa)」というような例で示される内属<sup>12)</sup>の問題であることが分かる。このように様々な句義や上位・下位の普遍、究極の特殊、ヨーガ行者の認識の問題など、PBh をはじめとするヴァイシェーシカ学派の文脈にたってみると、その内容がより明確になると言える。

### 3. TS16章における vidhi

これまではヴァイシェーシカ学派の句義などの問題を中心として16章冒頭の対論者の見解を見てきた。しかし、この冒頭部分に関しては、より多くの方向からの考察が必要である。次に本稿での主題である vidhi の問題に移りたい。TS・TSP では様々な文脈において vidhi が用いられている。ここでは、その

うち何例かを前後の文脈とともに試訳し、考察する。以下にその例を検討する。

3. 1. TS(P) k.910,911における vidhirūpa

〈資料6〉 [TS 290 : 24-27]

nanv anyāpohakṛcchabdo yuṣmābhiḥ katham ucyate/  
niṣedhamātram naiveha pratibhāse'vagamyate //910//  
kiṃ tu gaur gavaya hasti vṛkṣaś cetyādi śabdataḥ /  
vidhirūpāvasāyena matiḥ śābdī pravarttate //911//

[試訳]

(反論) あなた方はどうして他の排除をなす語を主張するのか。(答論) [語による知識の] 顕現があるとき排除のみでないことが理解される。むしろ逆に「牛」「gavaya」「象」「木」などのような語から、語〔とそれ〕による知識は肯定的な性質の判断によっておこる。

〈資料7〉 [TSP291 : 1-6]

anyāpohakṛc chabda / ity atreti śabdo'dhyāhāryaḥ / anyāpohakṛc  
chabda ity evaṃ katham abhidhīyata ity arthaḥ<sup>13)</sup> / kasmān nābhid-  
heyam ity āha niṣedhamātram ity ādi/ niṣedhamātram eva kilānyāpo-  
ho'bhipretaḥ, na ceha śābde pratibhāse niṣedhamātram gamyate kiṃ  
tarhi vasturūpādhyavasāyenaiva śābdī dhīḥ pravarttamānā samāla-  
kṣyate / na ca śābde jñāne yo na pratyavabhāsate sa śabdārtho yuk-  
to'tiprasaṅgāt /

[試訳]

「他の排除をなす語」とここで、iti という語が補われる。このような「他の排除をなす語」というのはいかにして〔意味対象が〕表示されるのかということである。なぜ表示されないかということをついたのが「排除のみ」という部分である。「他の排除 (anyāpoha)」とは「否定のみ」であると言われているのであり、実に語〔に基づく知識〕の顕現においては、「排除の

み」が理解されるのではない。その場合、なぜ実在するものとしての性質を判断することによってのみ語（による）観念が起こると知られるのか、と言うならば、語による知識に顕現していないもの、それは語の表示対象として結びつかないという誤りがあるからである。

〈資料6〉とその注釈〈資料7〉は16章において、一つの転換点を示す部分である。これらの偈に続いてバーマハ (Bhāmaha) やクマーリラ (Kumārila) あるいはウッディヨータカラなどの批判が引用され、それらの非判に対する仏教側の再批判が展開されるのである。シャーンタラクシタはアポーハについて「影像を本質としており、直観と呼ばれ、それは語から生じる<sup>14)</sup>」とした。彼はまた「語の〔表示〕対象は顕現であると真理の思索家は述べる<sup>15)</sup>」とも言っている。上記の資料においては言葉によってもたらされた顕現がある場合、必ずしも排除だけでないことが述べられているのである。ダルマキールティも概念知における顕現の問題について述べている。PVIIIでは普遍 (jāti) を批判するにあたり、それが自性として知に顕現するのは無始以来の迷乱である (PVIII.K29) とするのであるが、普遍とは自性をもった実在ではなく、実在する諸々の個物に依止して仮作された概念にすぎない<sup>16)</sup>。そして語はその概念を対象とする<sup>17)</sup> のである。

また〈資料6〉では kila-anyāpoha という一節が見られるが、この kila の語は仏教の論書の伝統においては重要な意味を持っていることが指摘されている<sup>18)</sup>。かつて世親は AbhK において有部への批判の意味をこめてこの語を用いたのである。そのようなことから、ここではアポーハが排除のみでないことを説こうとする意図があると思われる。

これらの資料〈資料6・7〉における vidhirūpa の周辺をみると、TS (TSP) 16章冒頭のアポーハ論者の見解部分〈資料2〉との共通点に気づく。ここで「非AをAと捉える知」としての判断 (adhyavasāya) が複合語の後分となっている点は〈資料2〉と同じである。そしてそのような肯定的性質を捉えることにより語 (śābdi) による知 (mati) が起こる (pra√vr̥t) のである。

〈資料6〉の vidhirūpāvasāyena は〈資料7〉では vasturūpādhyavasāyena となっている。

### 3. 2. TS(P) k966-k 1095, 1096における vidhirūpa

TS16章で最も多くの偈が引用され、さらに批判が加えられるのがSVにおいてディグナーガ以来のアポーハ論を批判するクマーリラである。彼の批判の中において vidhi はどのように用いられているのであろうか。以下においてはクマーリラのアポーハ論批判の中に見られる vidhi とその前後の文脈に注目したい。また同時にこのようなクマーリラの批判に対してシャーンタラクシタ・カマラシーラはどのように反論したのであろうか。対論者は「なぜ随伴が従属的で排除が優勢な語と証因が自らの対象を表示するのか<sup>19)</sup>」という問いを発している。そしてそれに対してディグナーガの PS. k 34 (下線部) が引用される。これについては [服部1975] の訳を用いる。

〈資料8〉 [TSP307 : 15-18]

“adṛṣter anyāśabdārthe svārthasyāṃśe’pi darśanāt śuruteḥ sambandhasaukaryam na cāsti vyabhicārite<sup>20)</sup>” tyādi varṇitam, tadapohābhyupagame na yuktam ity etatpratipādayann āha vidhirūpaś cetyādi<sup>21)</sup>/

[服部1975 : 12]

〔ある語の機能は〕ただ他の語の表示対象においては見られないから、そして自らの表示対象〔であるアポーハに概括されるもの〕の一部において見られることから、〔アポーハ論によれば〕語は〔表示対象と〕結合し易く、また〔他の語の表示対象への〕逸脱がない。と反論される。

「そのことはアポーハの承認に結びつかない。」として答論されたのが肯定的性質 (vidhirūpa) 云々である。

〈資料9〉 [TS307 : 19-20]

vidhirūpaś ca śabdārtho yena nābhyupagamyate //

na bhaved vyatireko'pi tasya tatpūrvako hi asau //TS966=ŚV.Apoḥa.  
110//

[試訳]

肯定的性質が語の表示対象であると認めない人にとっては排除（否定的性質の語の対象）もまたないであろう。実にその人々にとってのそれ（排除）はそれ（肯定）を前提とするものである。//966//

〈資料10〉 [TSP307: 22-24]

tat pūrvaka iti / vidheḥ pūrvaka / vidher nivṛtti lakṣaṇatvād vyatirekasyeti bhāvaḥ kiṃ ca nilotpālādi śabdānām viśeṣaṇavīśeṣyabhāvaḥ sāmānādhikaraṇyaṃ ca yad etal lokapratītaṃ tasyāpahnava'pohavāde prāpnoti /

[試訳]

それを前提とするものとは肯定を前提とするものである。排除は肯定の否定という特徴を持つことがあるからという意味である。そして、青いハスに関して限定－非限定関係そして、同一基体性であると、それら世間でよく知られているその批判がアポーハ章 (Apoḥavāda<sup>22)</sup>) にある。

まず、排除 (vyatireka) が優勢で随伴 (anvaya) が従属的であるとするディグナーガを批判する対論者の見解と、当のディグナーガの PS 5 章からの引用句が見られる。〈資料 8〉では所立 (sādhyā) がなければ証因 (linga) がないという正しい証相の第三条件が示される。そして次に証因があれば所立があるという第二条件が述べられる。そしてそれは証相と証相保持者の両者の間に不可離の関係があることを意味するのである。ディグナーガによると多くの属性すべてが証因によって認識されるのではなく、他の属性の排除によって随伴関係にある属性だけが否定的に知られるのである。例えば、火には炎や熱など多くの属性があるが、証因である煙はそれらを知らせない。ただその煙について随伴関係にある火のみが他〔火以外〕の排除によって知られるのである<sup>23)</sup>。

ここでの論議は随伴と排除についてである。クマーリラはしかしながら、デ  
ィグナーガに対する反論の偈〈資料9〉においては肯定的性質 (vidhirūpa-)  
と排除 (vyatireka) の組み合わせを用いている。NR によるとこの場合の肯  
定的性質と排除の例としてそれぞれ「牛」と「非牛」という語があげられ、  
「牛」が「非牛」の前提となっているので、アポーハ論によると循環論に陥  
る<sup>24)</sup> というよく知られている論法であることが分かる。

シャーンタラクシタの反論とカマラシーラの注釈は次のようになっている。

〈資料11〉 [TS : 339 : 5-8]

vidhirūpaś ca śabdārtho yena nābhyupagamyate /  
tadābhaṃ jāyate ceta śabdād arthāvasāyi hi //1095//  
svārthābhīdhāne śabdānām arthād anya nivarttanam /  
tadyogo vyatireko'pi mama tatpūrvako hy asau //1096//

[試訳]

肯定的性質が語の表示対象である〔と認める〕我々には認められない〔と思  
われているが〕なぜなら、その顕れを持つ知が語から生じるから、それが対  
象を判断 (決定) するものである。語には自らの対象を表示する場合、意味  
の上から他者の排除がある。実にこの否定もまた、それ (肯定) を前提とす  
るのが私にとって応理である。//1095・1096//

〈資料12〉 [TSP339 : 9-13]

na hy asmābhiḥ sarvathā vidhirūpaḥ śabdārtho nābhyupagamyate, ye-  
naitadbhavaṭ'niṣṭaprasaṅgāpādanam<sup>26)</sup> kriyate yāvat śabdād arthād-  
hyavasāinaś cetasaḥ samutpādāt saṃvṛto vidhirūpaśabdārtho'bhīṣyata  
eva / tattvatas tu na kiṃcid vācyam asti śabdānām iti vidhirūpas  
tātviko niṣidhyate / tena saṃvṛtasya vidhirūpasya śabdārthasyeṣṭatvāt  
svārthābhīdhāne vidhirūpe saty anyavyatirekasya samarthayād adhi-  
gater vidhipūrvako vyatireko yujyata eva //1095, 1096//

## 〔試訳〕

私達にとって常に肯定の性質が語の意味であると認められないのではない。あなたがたが仏教の結論を望ましくないと陥らせるそのようなものはない。ただし、次のような限りで〔肯定が〕ある。語により対象を判断するものである観念が生じるから世俗的には肯定的性質が認められる。しかしながら、真実としては言葉には少しも表示対象)はない。肯定的性質は真実としては否定される。従って世俗としての肯定的性質は語の表示対象として認められるから、〔語〕自らの性質が自ら現れ、肯定的性質であるとき、結果として他の排除の理解があるから肯定 (vidhi) を前提とする否定が理にかなっている。

先に述べたように、肯定的性質が排除の前提となっているとするクマーリラに対しての反論が行なわれている。TSP 〈資料12〉では世俗的には肯定的性質が語の意味であることを認め、真実としてはそれを認めない。この点はこれまでにも指摘<sup>27)</sup>されてきており、また16章冒頭のTSPにもそのような構造がみられる。

世俗的に肯定的性質を認めるという部分に関して先の〈資料6・7〉と同じように判断 (adhyavasāya) の語が用いられている。〈資料11〉のTSにみられる arthāvasāin は TSP 〈資料12〉から arthādhyavasāin であると分かる。そしてここでの複合語としての判断の語の前分は artha である。語による観念が起こる (samutpāda) という要素もこれまでの資料と類似する。このようにしてみると〈資料11・12〉の場合、〈資料2・6・7〉と共通の要素を持っていることはまちがいない、しかし〈資料11・12〉の場合、それぞれの要素としての語の格がこれまでの資料とは異っているために、格要素間の方向性が異なっている可能性が考えられる。

いづれにしてもシャーントラクシタとカマラシーラは世俗的には肯定を前提とした排除が理解されるとしている。

#### 4. TS(P)k977-k1152における vidhi

ここで、vidhirūpa 以外のかたちで16章に見られる vidhi の用例にも目を向けてみる。クマーリラのアポーハ論批判の一環として次のような句がある。

〈資料13〉

vidhyādāv artharāśau ca nānyāpohanirūpaṇam<sup>28)</sup> [ŚV.Apoha.k. 977ab]

儀軌などのあつまりが〔表示〕対象である場合、他の排除の理解はない。注釈の関連すると思われる部分は以下のようにになっている。

〈資料14〉 [TSP 311 : 25-27]

ādiśabdena nimantraṇāmantraṇādīnām grahaṇāmanyāpohasya-anyavya-  
vacchedasya na nirūpaṇām upalambho'sti / “na paryudāsarūpaṃ hi  
niṣedhyaṃ tatra vidyate<sup>29)</sup>” ity etatpūrvoktam evātra kāraṇam iti  
bhāvaḥ / ---

adī という語によって奉請や来請など<sup>30)</sup>が理解される。他の排除 [=他からの区別] には〔排除の対象となる行為〕は認められない。「その性質が〔名詞の場合のような〕否定である否定対象はここでは存在しない」と、それが先に述べられたのこそ、ここでの理由であるという意味である。

このクマーリラの批判に対して TS および TSP では次のように反論している。

〈資料15〉 [TS 353 : 15-16]

vidhyādāv artharāśau ca nāstitādi niṣedhyate /  
sāmarthyān na tu śabdena yad eva na vivakṣitam //1153//

[試訳]

儀軌などのあつまりが〔表示〕対象である場合、非存在は否定される。〔他の排除は〕語により〔理解され〕ない。話者の意図を〔理解するのでも〕な

い。それは含意〔によって理解〕される。

〈資料16〉 [TSP353 : 17-18]

vidhyāder arthasya niṣedhādīvyāvṛttatay'vasthitatvāt tatpratipattau  
samarthyād avivakṣitaṃ nāstitādi niṣidhyata ity asty evātrāpy anyāpo-  
hanirūpaṇam /

[試訳]

儀軌（命令）などの〔表示〕対象には禁令などのそれ〔異なり〕から異なったものとして確定することがあるから。以下のことが理解される。話者の意図としてではなく、含意として理解される。非存在などは否定されたのであるから、ここでまた、存在は他の排除であるとの理解がある。

クマーリラは願望法のかたちで表される儀軌などの場合、他の排除は成立しないとす。彼は TS 974偈以降、名詞以外の品詞におけるアポーハ論の難点を列挙してゆく。クマーリラはここで名詞に付く否定辞 (paryudāsa) の場合と動詞に付く否定辞 (niṣedha, prasajyapratīṣedha) の場合の機能の違いを理由として批判を行う。例えば「牛」という名詞の否定の場合、「馬」・「象」などであることが理解される。しかし、動詞の場合、例えば「料理する」に否定辞が付くとただ料理することだけが否定されるのであり、他の動作が理解されるのではない。<sup>31)</sup> クマーリラが行ったこのような動詞の場合におけるアポーハ論批判の論法は977偈にも用いられているのである。

また、この部分においてはミーマーンサーの祭祀的な要素やクマーリラの述べる「語と行為の関係」といった問題がその背後にあると考えねばならない。なおシャーンタラクシタとカマラシーラの反論であるが、儀軌などで表される対象が存在する場合、非存在は否定される。つまりその存在は他（非存在）の排除により成立するのであり、また直接的にではなく、あくまでも含意として表示するのである。T S Pにおいては非存在は禁令として置き換えられている。したがって、その反論は儀軌と禁令の両者をアポーハ論の「牛」と「非牛」の関係とみなしたうえでの批判であるといえる。

## 5, TS(P)k.997における vidhirūpa

最後に再び、論議の中心を vidhirūpa にもどして考察をおこないたい。

〈資料17〉 [TS 315 : 24-25]

anyā pohaś ca kiṃ vācyaḥ kiṃ vā'vācyo'yam iṣyate /  
vācyo'pi vidhirūpeṇa yadi vā'nyaniṣedhataḥ //997//

[試訳]

「他の排除 (anyāpoha)」は (A) 表示対象であるのか、それとも (B) 表示対象でないのか。表示対象である場合、(A-1) 「肯定的性質 (vidhirūpa)」として [表示されるの] かそれとも (A-2) 「他の排除」として [表示されるの] か。

〈資料18〉 [TSP316 : 5-9]

kiñcedaṃ tāvat praṣṭavyo bhavati bhavān kiṃ apoho vācyaḥ athāvācya  
iti / vācyaṭve vidhirūpeṇa vā vācyaḥ syāt anyavyāvṛṭty vā tatra yadi  
vidhirūpeṇa, tadā naikātikaḥ śabdārtha anyāpohaḥ śabdārtha iti athān-  
yavyāvṛṭtyeti pakṣaḥ tad tasyāpy anyavyavacchedasyāpareṇānyav-  
yavacchedarūpeṇābhidhānam tasyāpy apareṇety vyavasth syāt / athā-  
vācya tadā'nyasābdārthapohaṃ śabdaḥ karotīti vyāhanyeta //

[試訳]

まず、あなたは次のことを問う。

「apoha は表示対象であるのか。表示対象でないのか。」表示対象である場合、肯定的性質であるのか。それとも表示対象は「他からの異なり」であるのか。(A-1')もし、肯定的性質としてならばその場合、語の意味〔対象〕が一貫したものでなくなる。〔仏教徒にとっては〕「他の排除が語の意味」であるから。(A-2')表示対象が「他からの異なり」という論議の場合。「他からの異なり」はまたそれ自身である「他からの異なり」という性質によって表示される。それもまた、それ自身〔である他からの異なりによって表示され

る。] というように確定してしまうであろう。(B') また表示対象で無い場合、語は他の語の意味対象の排除をなす。という説と矛盾する。

まず、偈文中の試訳にも示したように対論者は「他の排除」に関して(A)表示対象である場合・(B)表示対象でない場合というように、大きく二つの選択肢を持ち出し、さらに前者を二つの場合にわける。従って三つの選択肢があるわけであるが、TSP には「他の排除=他からの異なり」が語の意味対象であるならば、これら選択肢のいずれの場合においても、矛盾が生じてしまうという理由がそれぞれ(A-1') (A-2') (B')として示される。そしてここでは、二つに分けられた(A)の選択肢の一方として肯定的性質 (vidhirūpa) が、そしてもう一方として他からの排除という性質 (anyavyavacchedarūpa) があげられる。対論者は(A-1')および(B')の場合仏教徒のアポーハ論とその選択肢が矛盾することを指摘するのみで、その選択肢の難点を指摘するのは(A-2')の場合のみである。そしてその選択肢についての難点の指摘がそのままアポーハ論批判となっているのである。なお TSP からはこの問いがウッドィョータカラにより発せられた<sup>32)</sup>ものであることが分かる

### まとめ

以上のように16章における vidhi の語について何例かを検討した。まず、16章冒頭に見られる対論者の呼称としてこの語が用いられていた。そしてその対論者の論議は PBh などをはじめとするヴァイシェーシカ学派の論議と深く関わっていた。

一方でクマーリラは排除が優位で随伴が従属的であるとするディグナーガの言語論に対して随伴にあたるものを肯定的性質 (vidhirūpa) と言い換えて反論していた。そしてそのクマーリラに反論するシャーンタラクシタ・カマラシーラの文脈中、例えば TS [TSPadTS] 1095にもこの肯定的性質が用いられていたわけであるが、その用例について注目することにより、共通して見られる要素としての判断 (adhyavasāya) が複合語の後分として用いられ、その前分を判断することにより、語による知識が起こる。という一貫した論法が確

認できた。この論法は TSP16章冒頭〈資料2〉のアポーハ論者の見解部分、TS〔TSPadTS〕k910-11〈資料6〉〈資料7〉における反論部分にも共通していることが指摘できる。今これを定式化して、(M.adhyavasāyena śabdaK pravrtti) とできるのではないかと考える。そして16章の用例によると、この場合のMにあたるのが abhedākāra, vasturūpa, artha, そして今回の主題に関連する vidhirūpa などであり、Kに代入可能であるのが pratyaya, dhi, mati なのである。そしてこれら一連の句はいずれも、仏教徒の側からの反論という文脈に見られる。このことは対論者と TS (TSP) の存在論や認識の過程に対する考え方の相違を示しているといえる。ただし〈資料11・12〉の場合、他の資料とその要素は共通するが、他の資料とは要素間の方向性が異なる可能性がある。

また肯定的性質を用いてアポーハ論批判を行うのはクマーリラだけに限らず、〈資料17〉と関連して述べたように、ウッディヨータカラからも発せられるものであり、肯定的性質と対象的な他の排除という性質の語がみられ、それがアポーハ論批判となっていた。以上において肯定的性質 (vidhirūpa) については何ヶ所かを試訳し、問題と思われる点を提起してみたが、〈資料1〉などにみられる個々の vidhi がそれぞれどのような関係であるのか、あるいはクマーリラによる様々な観点からの反論の中に見られる vidhi 〈資料13〉の問題など立ち入ることのできなかつた問題も多かつた。今後の課題としたい。

【テキスト及び参考文献】

- ABhk Abhidharmakośabhāṣya  
 NR see ŚV  
 PBh The Bhāṣya of praśastapāda together with the Nyāyakandali of Śrīdhara, Benares 1895.  
 PVIII see 戸崎 1979.  
 ŚV Ślokavārttika of Śrī Kumāriḷa bhaṭṭa, ed. by Swami Dvarikadasa Śāstry Varanasi 1978.  
 TS *Tattvasaṅgraha* of Śāntarakṣita with commentary of kamalaśīla, ed. by E Kṛshnamacharya, Baroda 1962. [GOS]  
*Tattvasaṅgraha* of Acārya śāntarakṣita with the commentary pañjikā of shri kamalashīla, ed. by Swami Dwarikadas Śāstri Varanasi [BBS1968] [BBS]

1997].

TSP see TS

VS Vaiśeṣikasūtra of Kanāda with the commentary of caṅdrānanda  
ed. by Muni Śrī Jambuvijayaḥ Baroda 1982.

Yaśo Sphuṭārtha *Abhidharmakośavyākhyā* the work of yaśomitra, ed. by U. wogihara Tokyo, 1936 [1989]

伊原照蓮

1951 「タットバサムグラハに於けるアポーハ説について」『文化』142,  
東北大学文学会, pp14-29.

1953 「陳那に於ける言語と存在の問題」『哲学年報』14号, pp101-127.

太田心海

1973 「ことば」の対象について,『佐賀龍谷短期大学紀要』18. 19合巻号,  
佐賀龍谷短期大学, pp273-290.

1976 「法称と寂護のアポーハ説」『印仏』(24-2)

沖 和史

1990 グルモーツタラ著『正理一滴論注』(Nyāyabinduṭīkā) 第一章における知覚判断

桂紹隆

1989 「知覚判断・疑似知覚・世俗知」藤田宏達博士還暦記念論集  
『インド哲学と仏教』平楽寺書店.

加藤純章

1989 『経量部の研究』春秋社.

北川秀則

1965 『インド古典論理学の研究』臨川書店.

戸崎宏正

1979 『仏教認識論の研究』大東出版社.

長崎法潤

1984 「概念と命題」『認識論と論理学』, 講座大乘仏教 9, [1996], pp341-368.

服部正明

1973 「Mīmāṃsāślokavārttika Apohavāda 章の研究 (上)」  
『京都大学文学部研究紀要』14

1975 「Mīmāṃsāślokavārttika Apohavāda 章の研究 (下)」  
『京都大学文学部研究紀要』15

1982 『京都大学文学部研究紀要』21

Jha, G.

1937 *The Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla ;  
English tradition*, vol.1.

Mookerjee, S.

1935 *The buddhist philosophy of universal flux*, Motilal Banarasidass, Delhi.

【注】

- 1) TS・TPSのページ数・偈文番号などはGOS本に基づく。BBS本によって訂正する場合にはそのつど注記する。なおBBS本は[BBS1968]・[BBS1997]の二種類を用いた。
- 2) この語は「perceptual judgement, 知覚判断」「間接的決定」「決知」「思いなす」など様々に訳され、研究も多く存化する。認識のプロセスの中における判断については[桂1989]や[沖1990]などを参照した。
- 3) [桂1989:542][戸崎1979:385] *anaksajyatvasiddhyartham ukte dve bhrāntidarśanāt siddhānumādivacanam sādhanāyaiva pūrvayoḥ //PVIII.289//*また[桂1989:542-3]ではこの判断がディグナーガにおいては世俗有知の問題として論ぜられていたことを『因明正理門論』の場合を例にとり解説する。
- 4) [Mookerjee 1955:107]
- 5) [伊原1951:20]では次のように述べられている。「肯定語義論者とアポーハ論者との対立は既にヴァイシュエーカ派のブラシャスタパーダと陣那との間に、現量の定義に関して見られるのである」そしてさらに、PBh, PSからそれぞれ根拠となる部分を引用している。
- 6) また[太田1973:274-5]においては〈資料1〉で示した *śabdaiḥ sāksād vidhiniṣedhyām vastusvabhavapratipādanād vidhir eva śabdārtha-*... について、「言語による肯定判断も否定判断も直接実在そのものについて述べるので肯定判断のみが言語の本来の意味である」というように提示する。
- 7) GOS *vṛttir asaṃbhavi* をBBSにより訂正。
- 8) BBSにより、*vidyate* と訂正
- 9) [PBh 11]

*Sāmānyam dvi vidham paramaparam cānuvṛtti pratyayakāraṇam / tatra param sattā mahābīṣayatvāt sā cānuvṛtter cva hetuvāt eva / dravyatvādy aparam alpa viṣayatvāt / tac ca vyāvṛtter api hetuvāt sāmānyayam sadviṣeṣākhyām api labhate //*

なお[伊原1953:106-7]ではブラシャスタパーダにおける上位・下位の普遍や有性の問題をとりあげ、ディグナーガとの違いを指摘する。

10) [PBh 321]

*atha viśeṣa padārthanirūpaṇam*

*anteṣu bhāva antyaḥ svāśrayaviśeṣakatvād viśeṣāḥ / vināśārambharahiteṣu nityad-ravyeṣv aṇuākāśakāladigātmamanassu pratidravyam ckaikaśo vartamānāḥ atyan-tavyāvṛttibuddhihetavaḥ / yathāśmadādinam gavādiṣv aśvādi tathas tulyākṛtiguṇak-riyāvayavasamyoganimittā pratyayavyāvṛttir dṛṣṭā gauḥ śuklaḥ śighragatiḥ pī-nakakudamān mahāghaṇṭa iti /*

次に特殊の句義を説明する。

最終における究極的な存在は自らの依りどころの〔他からの〕異なりを示すものである

から特殊である。消滅や発生を離れた恒常な実体に関して、つまり、原子・虚空・時間・方角・我（アートマン）・意に関して個々の実体ごとに、一つ一つ存在していて究極的な排除の知〔が起きる〕原因である。私達にとって、そのように牛等に関して馬等から、等しい形相・属性・運動・部分・結合という根拠があり、観念の排除が見られる。つまり、「牛」「白い」「速く行く」「隆肉を持つ」「大きい鈴をつけている」というものである。

- 11) [VS 61] iheti yataḥ kāryakāraṇāyoh sa samavāyaḥ //7. 2. 29//

チャンドラアーナンド注では次のようになっている [VS : 61]

guṇādayaḥ samavāyino dravya / ataḥ samavāyaṃ kathayati iheti yataḥ kāryakāraṇāyoh pratyaya utpadyate 'iha tantuṣuḥ paṭaḥ' iha ghaṭe rūpādayḥ iha ghaṭe karma 'iti samavāyaḥ / kāryakāraṇagrahaṇasopalakṣaṇatvāt 'jātery vyaktau viśeṣāṇaṃ ca nityadravyeṣu samavāyaḥ' ity uktambhavati /

- 12) [PBh 324-325]

yateha kuṇḍe dadhiti pratyayaḥ sambandhe sati dṛṣṭas tatheha tantuṣu paṭaḥ iha viraṇ eṣu kaṭaḥ iha dravye guṇakarmanī iha dravyaguṇakarmasu sattā iha dravye dravyatvam iha guṇe guṇatvam iha karmaṇi karmatvam iha nityadravye 'ntyā viśeṣā iti pratyayadarśaṇād asty eṣāṃ saṃ bandha iti jāyate //

例えば「この壺に凝乳がある」という観念は〔両者の〕結びつきがあるとき見られる。そのように「この糸に布がある」「この草に筵がある」「この実体に属性性と行為性がある」「この実体・属性・行為に存在性がある」「この実体に実体性がある」「この属性に属性性がある」「この行為に行為性がある」「この恒常な実体に究極の特殊がある」という観念が認められるから、ここに関係があると分かる、とういうことが知られる。

- 13) [BBS1997 : 251] ではここまでを910偈 (=BBS909偈) の ab 句に対する注釈であるとする。

- 14) [長崎1984 : 350] とその注18) 参照。

- 15) [長崎1984 : 351] とその注20) 参照。[TS, GOS. k1078-9] pratibhāsaś ca Śabdārtha ity āhus tattvacintakāḥ / dṛṣya kalpavibhāgajño loko bāhyaṃ tu mayate // tasyā-to'sāyena vyaktinām eva rācyatā / tattvataś ca na sabdānāṃ vācyam astiti sādhitam //

- 16) [戸崎1979 : 94] 参照。

- 17) [戸崎1979 : 94] 参照。

- 18) [加藤1989] は AbhK の偈文に見られる kila の語に注目し、スティラマティやヤショーミトラの註、あるいは『順正理論』などから偈文中の kila がすべて世親の有部に対する不信を表し、またそのほとんどが経量部の見解に基づいていることを指摘する。例えば次のようなことが指摘されている。I. 3 偈 cd 句ではアビダルマは仏説であるという内容が示されるが、ここに、kila の語が加えられる。このことに関してヤショーミトラは kila の語は他者の見解を示すものであり、自らの立場である経量部の見解ではないと述べている。kila śabdaḥ parabhiprāyaṃ dyotayati ābhidhāmikāṇāṃ etan mataṃ na tv asmākaṃ

sautrāntikānām iti bhāvaḥ [yaśo11].

19) [TS 307 : 15-18]

kiṃ ca yad etad bhavadbhir anvayopasarjanayor vyatirekapradhānayoḥ śabdaliṅgayo  
ḥ svaviśayapratipādakatvaṃ.

20) [Hattori 1982 : 135]

sgra gzhan don la ma mthong phyir / rang don cha shas la mthong phir / sgra yi' brel  
pa sla ba dang 'khrul pa nyid ni yod ma yin.

21) vidhirūpaś cetyādi [BBS 1997] には見られない。[BBS 1968] には見られ、vidhirū-  
patva の読みがあることを示す。

22) デイグナーガのアポーハ論に対し、クマーリラはŚV. Apoha. k115以下において、同一  
基体性、限定詞・被限定詞の関係という点から論じる。apohamātravācya-tvam yadi  
vābhūyapagamyate nilotpālādiśabdeṣu śabalārthābhīdhāyīṣu // viśeṣaṇaviśeṣyat-  
vasāmānadhikaraṇayayoḥ na siddhir……

23) [北川1965 : 462]

thos don du ma gtan tigs kyis rnam pa thams ced durtogs min gang dang 'brel pa  
yongs bsded nas chos gzhan dang bral thob par byed //

またデイグナーガは、人が蓮華の香りから、そこに蓮華があることを推理する場合、非実  
体などを排除して否定的なかたちで蓮華であると認識するという例もあげている。

yon tan dri dang dri bsung sogs (thogs) de yi bye brag gi rim pas rdzas moi la sogs  
rnam bcaed nas su tpala sogs re re rtogs.

24) [NR 420]

vidhirūpagośabdasiddhau tadvyatireko 'gośabdasiddhiḥ tadabhāve tv agosab-  
dāsiddhau tadapohātmakagośabdasiddhiḥ tadsiddhau ca gośabdasiddhaḥ ititaretarāś  
rayaḥ syāt /

25) [BBS 1968 : 416] [BBS 1997 : 291] とともに -tadyuktāu.

26) [BBS 1997 : 291] のみ pādānam.

27) [長崎 1984 : 351] など参照。

28) [TS 311 : 19-20].

29) [TS.k974cd 句].

30) [Jha 1986 : 525] ではそれぞれ invitation, addressing と訳されている。

31) [服部 1975 : 35-6] 参照。

32) [服部 1975 : 5]

sarvatrābhedād āśrayasyānucchedāt kṛtsnārthaparisaṃmāptēś ca yathākramaṃ jātīd-  
harmā ekatva [nityatva] pratyekaparisaṃmāptīlakṣaṇā apoha evāvatiṣṭhate---